通級指導学級と連携した、体育科の授業改善について
－通常の学級における、発達障害の特性への配慮や指導の工夫－

所属校：文京区立小日向台町小学校
氏　名：小　　林　　繁
派遣先：玉 川 大 学 教 職 大 学 院

キーワード：特別ではない特別支援教育・ゲーム・ボール運動・かかわりの調整・学級経営

Ⅰ　研究の目的

私が情緒の通級指導学級担任として、これまで出会った通級児童の中には、うまくできない経験が重なり、次第に体育の授業参加に消極的になったり、登校しぶりの要因となったりなど、いわゆる二次障害を引き起こすケースがあった。これを未然に防ぐためには、どのような指導の工夫や関係機関との連携が効果的であるのかを考察したい。

また、通級児童が在籍する学校（以下、在籍校）の担任との相談を多く重ねてきた。その中では、体育の授業のことで相談されることが度々あった。体育科は、その目標においても、「楽しく」学ぶことを大切に扱う教科である。その体育の授業が、なぜ「楽しく」なくなってしまうのか、発達障害の特性との関連を探ってみたいと考えた。

そして、これらの指導の工夫や連携が、発達障害等がある児童に限らず、教室のどの子にとっても有効であるかを検証する必要があると考えた。

そこで、研究テーマを「通級指導学級と連携した、体育科の授業改善について」、副主題を「通常の学級における、発達障害の特性への配慮や指導の工夫」として、通常の学級での体育科の指導の工夫と、通級指導学級との連携の在り方を追求することとした。

本研究を通して、発達障害の特性に配慮した体育科の指導法や、通級指導学級と通常の学級の連携の手立てについて考察した内容を現場に伝え、どの子も「楽しく」学べる体育の授業づくりに生かしたいと考えた。

Ⅱ　研究の方法

１　関連法規にみる研究の意義付け

研究主題にかかわる法規を検索する。

２　ゲーム・ボール運動領域で育てる力の整理

研究を焦点化するため、領域をゲーム・ボール運動に絞る。体育科学習指導要領をもとに、ゲーム・ボール運動領域で育てる力を次の項目で整理する。

①　学習指導要領に見る体育科の目標と内容
②　学年の発達段階に応じた系統性
③　ボール運動領域の特性
④　ゲーム・ボール運動で育てる力のポイント

３　発達障害等がある児童の体育科授業参加上の課題と生かすべき長所の例示

体育科ゲーム･ボール運動領域に関する先行研究や参考文献、及び自身の現場経験をもとに例示する。

４　検証授業

抽出した通級児童の在籍校に協力により検証授業を行い、連携の成果と指導の工夫の効果を考察する。

Ⅲ　研究の結果

１　関連法規にみる研究の意義について

学校教育法等の一部改正により、幼稚園、小・中学校、高等学校及び中等教育学校のいずれの学校においても、発達障害を含む幼児児童生徒に対する特別支援教育を推進することが法律上明確に規定された。

また、新学習指導要領（平成２０年度３月告示）の総則第４章２（７）では、障害の状態に応じた指導内容の一層の工夫を図るべき旨を規定している。

ここに、通常の学級における、発達障害の特性への配慮や指導の工夫の根拠があると考えた。

２　ゲーム・ボール運動領域で育てる力の整理

体育科学習指導要領の目標や内容をもとに、学年の発達段階に応じた系統性を表に表した。

《　学習指導要領に見る体育の目標、領域、内容についての系統表　》

	第１学年及び第２学年	第３学年及び第４学年	第５学年及び第６学年
目標	①　基本的な動き ②　だれとでも仲よく ③　意欲的に ④　運動の場面で 健康・安全に留意	＋技能 →協力，公正 →最後まで努力して ＋身近な生活において 体の発育・発達への理解 健康で安全な生活を営む	＋特性に応じた → →自己の最善を尽くして →心の健康、けがの防止 病気の予防
領域	ゲーム ○勝敗を競い合う運動をしたいという欲求から成立した運動 ○仲間と力を合わせて競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動		ボール運動 ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動
内容 (1) 技能	・ボールゲーム ・鬼遊び 楽しく、動きができる ア　ボールゲーム ・的に当てるゲーム 攻めと守りのあるゲーム ・簡単なボール操作 ・ボールを持たないときの動き	「ゲーム」として、ゴール型・ネット型・ベースボール型に分類 易しいゲーム ・動きをする ア　ゴール型ゲーム ・基本的なボール操作 ・ボールを持たないときの動き イ　ネット型ゲーム ・ラリーを続ける ・ボールをつなぐ ウ　ベースボール型ゲーム ・蹴る、打つ、捕る、投げるなどの動き	「ボール運動」としてゴール型・ネット型・ベースボール型に分類 →技能を身に付ける 簡易化されたゲーム 攻防する ア　ゴール型 →ボール操作 →ボールを受けるための動き イ　ネット型ゲーム →チームの連携による攻撃や守備 ウ　ベースボール型ゲーム →ボールを打ち返す攻撃 →隊形をとった守備
(2) 態度	・きまりを守り ・仲よく運動 ・場の安全	→規則を守り ＋勝敗を受け入れたり ＋用具の安全	→ルールを守り →助け合って運動 →気を配る
(3) 思考	・簡単な規則を工夫 ・攻め方を決める	→規則を工夫 ・ゲームの型に応じた簡単な作戦	→ルールを工夫 ・自分のチームの特徴に応じた作戦

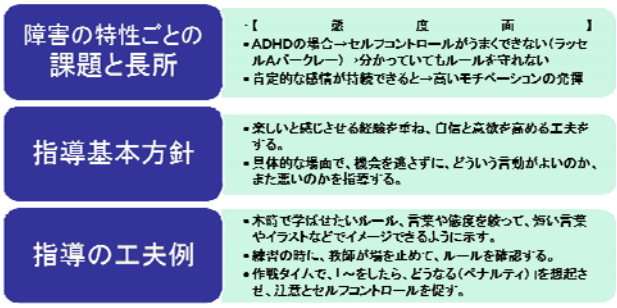
また、ゲーム・ボール運動領域で育てる力のポイントについて次のように整理した。

《技能》①ボールを操作する力②ボールを持たないときの動き、
《態度》①ルール等を守る態度②協力・公正などの態度、
③意欲的に参加する態度　④健康・安全への留意、
《思考》①ルール等を工夫する力　②作戦を立てる力

3　発達障害等がある児童の体育科授業参加上の課題と生かすべき長所の例示

発達障害等がある児童が体育の授業に参加する上で課題となりえることや、生かすべき長所について、技能面、態度面、思考・判断面に分類して例示した。

また、それを踏まえた指導の基本方針と指導の工夫についても例示した。以下の図は、その抜粋を図にしたものである。



4　検証授業にみる連携の成果と指導の工夫の効果

(1)　指導の連続性が見える学習指導案の作成

単元導入前の在籍校訪問、事前の授業観察、指導の工夫の情報交換、通級指導学級での先行指導を行った。それらの連携にあたって学習指導案を作成した。本時の展開については、通級指導学級と通常の学級における展開をＡ３一枚の紙面に表し、二つの場での指導の関連が見えるようにした。

(2)　通級指導学級における先行的な指導の効果

通級指導学級では、在籍校の周囲の児童から評価されうる力を発揮できるように、先行的に学習を進めた。本単元に向けて培おうとした力は、ボールを受けるための動きである。複数担任のメリットを活かし、児童チーム対教師チームで実際にゲームをする中で動き方を指導した。また、ゲーム終了後、ゲームの中で課題と思われた場面を再現し、その場面において、どう動けばパスを受けることができるかを指導した。

(3)　通級と共通にした指導の工夫の効果

①　毎時の目標が明確であった。通級指導学級で、どんな指導をしたのかが分かり、そこに繋げようとする意識が高まった。授業が進むにつれて、児童のどんな力を引き出せばよいか見えてきた。

②　ゲーム前の共通確認、ハーフタイム、第一試合と第二試合の間と、作戦タイムを入れたことで、抽出児童も含めチームの作戦への理解が深まった。

③　言葉で指示しても分かりにくい動作やルールを、イラストも入れて掲示したことが効果的であった。

(4)　教師による児童間のかかわりの調整

抽出児童は、教師の声かけを模倣し、「ボール固まらないで」と積極的に声をあげていた。それに対して、周囲の児童の中には「言われなくても、分かっている。」と反感を感じる児童も想定された。担任はそれを見越して、「はじめは意識していても、だんだん固まってきちゃうから、広がろうね。」と言葉をかけていた。誰もが頷くとともに、他の子からも「広がっていこう！」との声かけが続いたのである。この短い教師の言葉が、抽出児童の言葉を価値付けた効果は大きいと考える。

(5)　学習カードにあらわれた抽出児童の成長

抽出児童は、学習カードに次のように書いている。「声かけもたくさんできたし、チームの作戦の裏シュートも上手くできたので、とてもよかった。」この記述から、声かけへの意識やチームの作戦への理解の高まり、チームプレイができたことに成就感などが見える。

保護者から「学習カードを見て、何をがんばっていたのかが、よくわかりました。連携して随分工夫してくださったのだなと思いました。」と感想をいただいた。

Ⅳ　考察

体育科は、集団行動やかかわりながらの活動が多い教科である。また、勝敗が絡んでくると互いの評価も厳しくなりがちである。社会性やセルフコントロールに課題がある児童が教室にいるとき、指導が難しいと声があがるのも無理はないと思われる。

しかし、体育科こそ、社会性やセルフコントロールのスキルを効果的に学べる教科ではないだろうか。そのためには、どの子にも分かりやすく、成就感を得させる指導の工夫が大切であるが、そこで鍵となるのが、周囲の児童とのかかわりの調整ではないかと考える。通級指導学級との連携で生かすべきは、この調整をするための発達障害等の特性を踏まえた児童理解と、指導の工夫の具体例であろう。そのためには、指導の基本方針の共有からもう一歩踏み込んで、互いの指導がイメージできる打ち合わせが大切だと考える。

検証授業後、他の教科学習においても、臆せず輪の中に入るようになったと在籍校担任が話していた。

このような指導の工夫や連携の充実が、周囲の児童のかかわり方も育て、よい意味で発達障害等がある児童が目立たず、特別支援の視点に立った、どの子も「楽しく学べる」学級経営につながることを期待する。